



まきの木

学校の教育目標

『心豊かに伝え合い たくましくやりぬく子』



幼保小の連携

堀津小は、幼保小連携先進校として、教育委員会や堀津保育園と協力して
羽島市型「架け橋カリキュラム開発」に携わってきました。教員間の授業参観
や保育実習、職員研修などを通して、幼保小連携の必要性を共有し、カリキュラム
開発を進めました。現在、この研究実践が市内全小学校へ広がっています。

保育園や幼稚園の遊びの経験を生かした、小学校1年生への穏やかでスムーズ
なつながり、生活科を中心とした総合的な教育課程の編成とモジュールによる弾力的な時間割運用など、環境構成の
工夫を行ってきました。このような先進的な取組に対して、堀津小に大学や大学院から研究視察の方が訪れています。

① ゆとりある時間設定

朝の登校から8時15分までを1年生の準備の時間として、自分のペースでかばんを片付ける、かがやきルーム(自由に
遊べる部屋)で過ごす、他学年にあいさつなど、自由に過ごす時間を設けています。4月当初は、45分授業を20分→5
分休憩→20分を目安に活動を切り替えるようにしてきました。

② 保育園・幼稚園の遊びを小学校の学びにつなぐ

保育園や幼稚園の遊びの体験と小学校の学習内容をつなぐことを心掛けています。例えば、音楽科「うたっておどって
なかよくなろう」では、保育園で歌っていた歌を交流しました。その後、「1年生になったら」を振り付けて歌いたいと子ども
から提案があり、みんなで楽しく歌うことができました。これは、「自己選択・自己決定」を通して、児童の知りたい、やってみ
たいという気持ちを大切に学習です。

また、生活科「学校探検」では、学校のどこを探検したいかを自己選択・自己決定(生活科)→教室へ入る時の挨拶の仕
方(国語科)→先生に出会う(生活科)→自分の名前を知ってもらう(国語科)など、各教科をつないだ学習をしました。

このように児童自身で活動の楽しさを見出し、「今度はこうしたい。」「もっと〇〇したい。」と、願いや意欲をもって学ぶ
姿が生まれています。



夏休みは「物語読書」を

7歳の頃に読書を多くしていた子は、そうでない子よりも11歳の時点で情緒が
安定していたと、イギリスの調査で報告されました。読書が子どもの脳の発達を促
して感情をコントロールすること、また人間関係の葛藤を和らげるワクチンとして
作用すると考えられます。(※科学的根拠が教える子どもの「すごい読書」より一部抜粋)

・読書が子どもの脳の発達を促して感情をコントロールする。思春期の新しい経験

を前に、さまざまな人間関係の葛藤を描く物語を読むことで不安を解消し、実際に自分が葛藤状態に陥ったときに、うまく
解消する力になると考えられます。

・物語には主人公と周りの人々の人間関係が描かれます。「主人公と仲間の関係は素敵だ」「こんな恋愛がしてみたい」「お互
いを認め合ったライバル関係にあこがれる」など、様々な形で子どもは人間関係のイメージを持ち、「登場人物みたいになり
たい」という人生のロールモデルをつくっていきます。

・「思い通りにならない体験」のことを「世界の押し返し」と表現し、社会の中で成長していくために必要なことです。重要なこ
とは、自らが行動し、その結果を受け止め、一歩踏み出すこと。それを続けることで、憧れた主人公のような人生を、いつかは
つかめるかもしれません。物語読書は、行動のための後押しとなり、物語の世界から現実の世界への架け橋となる可能性を
秘めています。

○人生の豊かさは、想像と体験から生まれます。長い夏休みだからこそ「物語読書」を

